

“湘南”論

孔を喰む（湘／無地／地理）：零度_1

堀家 敬嗣*

What is SHONAN : 0.1

HORIKE Yoshitsugu*

(Received September 25, 2020)

0.1 “湘南”の起源

0.1.1

“湘南”とはなにか。それを問う誰もが、そう問うた瞬間に、ある困難に直面せずにはいない。というのも、いまや全国的に広く知られた地名であるはずのこの語は、にもかかわらずこれに対応する固有の場所を、地理的に、したがって地図上に安易に参照させることを拒むからである。“湘南”のなんたるかを問うとき、この語が宛るところを空間的に同定できない困難を、まずもって私たちは引き受けなければならないのである。

そもそもこの「湘南」の命名は、中国湖南省の洞庭湖に注ぐ湘水の南方一帯の景勝地にちなむ¹ものであるとされる。わけでも「中国文学における「湘南」は、地志に記すところの漢以来の県名（湘南県）をいうものではなく、文学の用例から言えることであるが、湖南省最大の河流たる湘江（湘水）の流域一帯をいい、別称は瀟湘である²。ただしこの「瀟湘トハ、一所ニハアレトモ、別々ナリ」³。瀟湘とは、湘水に加えその「支流の一つ「瀟水」（九疑山（…）に源を發して北流し、永州市付近で湘江へと合流する川の名）の流域」⁴をふまえた名辞とするものだが、「古くはこの瀟水をも湘水と呼びならわし、瀟水→湘水→洞爺湖に至る山紫水明の流域が、「瀟湘」のイメージの中核となる」⁵。というのも、「唐代以前に瀟水の名稱は見られず、（…）それが河川の正式名稱として現われてくるのは宗代以降で（…）「瀟湘」とは本来、「瀟なる」「湘水」の意味であり、その清らかな湘水の流れを表す一種の美稱として」⁶成立したところと考えられるからである。

やがて、「東晋以来、従来は殆ど現れなかった湘南の風景描写が詩文に現れてくる。こうした描写が現れてくるのは、長江流域の山水の美に対する漢民族の開眼が、特に、晋王朝が北胡に追われて（…）南渡して江南の美しい自然に触れた貴族知識人の間に自然愛好の気風が生じ、それに伴って、山水詩が出現した」⁷ものであり、「かくして南朝の時代に、湘南はその風景が、作者の体験であれ想像であれ、美しい詩歌の素材になってきたことが看取される」⁸ようになる。

いずれにしても、湘南とは、長らく古典的な藝文に言及されてきた風光明媚な景勝地として、いまなお中国に所在する一地域である一方で、「相模国の南部を意味し、相南とすべきところだが、中国の湖南省湘江の南部地方を示す湘南の名をとったものといわれる」⁹限りにおいて、日本の“湘南”の場合にはこの援用にすぎないのだから、「湘南という地名は、土地に由来する地名ではなく、一種の雅称である。歴史地理的な淵源を持たないのである」¹⁰。そして“湘南”の語が歴史地理的な淵源を持たないことは、“湘南”とはなにかと問うことを、しばしばその在処をめぐる議論へと矮小化せずにはいない。実際に、“湘南”について言及するものの多くは、その過程で自身の思惑を適度にそこに反映させながら、この語に該当する空間的な範囲をときとして恣意的に設定する。この意味において、それらが提示する“湘南”の在処とは、結局のところこうした政治性の期待値のうちに収斂するよりほかない。

「どの範囲が湘南であるかという設問である。（…）西は大磯辺りまで、東は茅ヶ崎、藤沢、鎌倉、逗子、葉山までの海岸線に近い地域を湘南と限定したい」¹¹。あるいは「筆者は、湘南というゾーン設定については、まさに地域の不動産価値の最大化を指向したゾーン設定がもっとも的確なものである、と考えている。これによ

*1 山口大学国際総合科学部

るならば、湘南とは、実は東から西に広大な太平洋に連なる相模湾に面した葉山町、逗子市、鎌倉市、藤沢市、茅ヶ崎市の四市一町から構成されるゾーンということになる¹²。さらには、「『湘南スタイル』が考える湘南とはどこからどこまでなのですか?とよく聞かれるが、実はあまり考えていない。というより、よくわからない曖昧さが『湘南』の良さだと思うから、あえて決め付けないことにしている。これまで『湘南スタイル』で取り上げたのは、西は横須賀市の佐島から東は二宮までと、かなり広いエリアである」¹³。

こうした局面では、たとえば“湘南”の当事者としてこの美称の効用に与る資格を相応に有すると思しき大磯町でさえが、「『湘南』の名は(…)現在の行政区では、おおよそ鎌倉市・藤沢市・茅ヶ崎市・平塚市・大磯町・二宮町の各町村が該当する」¹⁴などと、さしたる根拠も示さないまま町史に登録している。それどころか、神奈川県をめぐる地名の網羅的な捕捉を試みたはずの辞典までが、“湘南”について、その「生活圏としては、鎌倉市・藤沢市・茅ヶ崎市・平塚市・高座郡寒川町・中郡大磯町・二宮町から成る」¹⁵と指摘したものと同一筆致で、「一般に湘南地方とは、東は鎌倉・逗子・葉山、西は平塚・大磯・二宮までをも含めていう」¹⁶とも記載する。

いずれにしても、これらの記述における“湘南”の範疇は、明確な境界線を描く必要のある行政区すなわち市町村の単位をめぐって言及されている。そしてこうした事情は、その境界線の此方と彼方のいずれかに砂の一粒ごとを帰属させようもないはずの浜辺についても、いささかも変わるところがない。「湘南海岸〈茅ヶ崎市・藤沢市〉／藤沢市から茅ヶ崎にかけて、約10kmにわたる相模湾に臨む海岸」¹⁷。「大磯から茅ヶ崎、藤沢の江の島にかけての湘南方面の海岸」¹⁸。「逗子・葉山から藤沢や茅ヶ崎までの湘南海岸一帯には多くの米軍基地が配置されていた」¹⁹。「七里ヶ浜はまた、逗子・葉山から伊豆の真鶴岬にかけての相模湾にのぞむ『湘南海岸』の、ちょうど中央部に位置している」²⁰。

こうした言説、つまり“湘南”の在処をめぐる議論へと矮小化された問いは、最終的には、目を凝らせば凝らすほど霞み、耳を澄ませば澄ますほど暈け、いわば不可能性のうちに遠ざかるある種の桃源郷へとこの語を送り返す。「陶淵明の語った桃源郷は、(…)近代ユートピア思想を超えてさらに先に人間の自由と平等の理想郷を指し示す思想とさえ言ってよいのかも知れない」²¹。けれどまた、その一方で、“湘南”の名辞を空間的に捕捉しようとする姿勢における、それぞれの事情にしたがった政治性そのものを正当化すべく、いったん矮小化した問いは、今度はその時間的な捕捉へと局面を移行させることになる。もちろん“湘南”の由来は明らかであるから、こ

こでの問題は、あくまでもこの語について、その使用の起源へと時間を捲ることにある。

0.1.2

“湘南”の語の使用について、ただ単にその使用の起源へと遡るならば、おそらくそれは、この語の由来とのあいだにほとんど無媒介的な因縁を保持しているにちがいない。なによりもまず、「湘南は『楚辞』によって初めて楚の悲劇的事件の舞台として文学に登場している」²²ものの、これ以後、南朝のころによろやく「その風景が、作者の体験であれ想像であれ、美しい詩歌の素材になってきたことが看取される」²³ところであって、ここから唐突に遮断されたかたちで、そこからいかなる影響も波及しない機会に、突如として“湘南”の語が出現することなど、およそありえないはずである。

たとえば京都の西芳寺には、この語を冠した茶室として湘南亭が現存している。なるほど「応仁の乱の戦火は、洛外の西芳寺さえ避けることはできなかった」²⁴うえに、「もともと西芳寺の地域は山谷の入り口に当たる西芳寺川をはさむ扇状地」²⁵で、そうした立地の都合から「洪水に襲われる宿命をかかえていた」²⁶こともあり荒廃していたところを、この建築物については「千家二代の少庵(一五四六～一六一四)が晩年の隠居所として再興したと伝えられ」²⁷、国の重要文化財にも指定されている。この西芳寺はもともと浄土宗の西方寺といったが、ここに招かれてこれを臨済宗の西方寺として改め、その中興開山となったのが夢窓疎石(1275-1351)である。その境内の池畔に湘南亭を設えたのもまた、彼であった。

この茶室の亭名は、そもそも禅の公案を由緒とする。『碧巖録』の第十八則にある「唐の代宗と、忠国師とのあいだに交わされる、無縫塔の話」²⁸において、忠国師の弟子である応真が口にする偈頌では、「湘之南、潭之北。(…)中有黄金充一國」²⁹と説かれている。ここでいう「湘の南、潭の北とは、古代中国民族が、永遠の魂の集まる処と信じた、雲夢の沢のことである。湖南省の北にある、洞庭湖を中心にひろがる、神仙のくにである」³⁰。瑞泉寺の発端となる瑞泉院を二階堂の地に開いていた夢窓は、鎌倉の幕府が滅亡してほどなく、朝廷がたに請われて入洛する。それからしばらくのち、西方寺を、自らの墓となる寿塔を築く終焉の場と定めて西芳寺とし、その黄金池畔の南北に湘南亭と潭北軒とを配置する。このとき、まさに彼は「中国の禅の公案を造型化し、視覚化してみせる工夫」³¹としてこれを成就したのであった³²。

西方寺の古い池泉回遊式庭園の遺構を再興したこの黄金池畔の庭園を下段として、その上段は「新しい枯山

水の庭園となる。寿塔の思想は、むしろこの方に特色をもつ³³かもしれない。しかしながら、厳密には寿塔というよりも、枯山水のこの石庭こそは夢窓の墓石となるのであり、また湘南亭や潭北軒を配した黄金池畔を含む境内の全体がその墳跡であるとも考えられよう。そしてこの限りにおいて、なるほど「西芳寺は夢窓の墓である、(…) ここには黄泉国と浄土が同居している」³⁴わけだ。実際には「この付近には古墳が発達しているので、作庭に古墳の大石が使用されたという見方や、古墳の遺構を生かしたという見方などが存する。(…) もし古墳であったとしても、それは素材として国師の作庭意図に適い、(…) 一素材として国師によって布局の一部に組み入れられたものなのである」³⁵。

それでもなお、そこにあるのは、具体的な事物をもって構成された空間による思想の比喩であり、理念の知覚的な見立てであり、無限の瞑想を人智の規模に仕立てなおした精緻にして大胆な縮小模型である。あくまでもそれは、「禅的な境地を外界の事物に託して表明する、禅宗独特の「偈頌」の対象」³⁶なのであって、仮にこのとき「現在の西芳寺にある黄金地を見ても、これは浄土を彼方に望む海というべきだろう」³⁷。

つまるところ、湘南亭に謳われる湘南とは、まぎれもなく禅の理念を、その思想を表象する境地、すなわち禅境なのである。どう少なくみつもりょうとも、「元来湖南省は中国中南部に位置し、洞庭湖の南方にひろがる山紫水明の地域であるが、唐代禅発展の拠点の地でもある。また一方で宋代禅宗史においては以後の教団発展を占う重要な地域であろう」³⁸から、およそ“湘南”の語は禅の文化と無縁ではいられない。それは、なによりもまず、禅の理念と思想を参照しながら、私たちがその理想郷としての浄土へと送り返す符牒にほかならない。

たとえば「東晋時代、孝武帝の太元年間（三七六～三九六）のころのこと、今の湖南省、洞庭湖の西岸の武陵の山地に、漁を生業とするものが」³⁹いて、その生業に「夢中に、あるいは無心になっていたその間に、彼はいわば即日常の次元を脱け出て、自分の乗っている小舟ごと、異境に滑りこみかかっていた」⁴⁰。桃花源の境地とは、こうしていつともどことも知れないまま、それと気づいたときにはすでにその持続のうちに組み込まれてしまっているものである。そしてここでは、「たとえほんの東の間であろうと意志と意識の空白状態を経過するか、空間ないし時間のトンネルをくぐり抜けるか」⁴¹しなければならぬその限りにおいて、“湘南”の語にとっての湘南とは、はじめから存在することのない、そのためいつまでも到達することの不可能な地理となる。

その在処をいま私たちが探ろうにも、けっしてこれを同定しえないことは、だからこの語の来歴によればむし

ろ当然とも思われる。“湘南”の地理は存在しない。“湘南”とは、したがって地理的な虚無であり、虚空なのである。とはいえそれは、「関係によって現象は起こるのであるから実体はないというほどのこと。それを「空」と呼ぶのだが、もとより(…) 何も存在しないということではなく、変化し続ける事象の中で対立する両者を含み、成立させる場として現にそこにある、という考え方である」⁴²。

それゆえに、“湘南”とはなにかを問うことの意義は、いまなお維持されている。というのも、依然としてそこには、無としての、空としての“湘南”が存在するからである。たとえばここで、ロラン・バルト (Roland BARTHES, 1915–1980) の至言に頼るならば、それは“湘南”の零度となるだろう。「ゼロ度とはだから本来何もないことの意味ではない(…)。ゼロ度とは、ないことが意味(記号作用)を持っていることである。(…) ゼロ度は、すべての記号体系が「無から意味を生ずる」力を持っていることの証拠となる」⁴³。ここで“湘南”は、それに対応する場所へと着地することのできないまま、にもかかわらず地名とみなされ浮遊する能記となるしかない。

0.1.3

かねてより「鎌倉の命運を予期し」⁴⁴、当代の比類なき高僧として否応なく「公武の動向に注視する夢窓は、鎌倉幕府滅亡まで、幕府にもまた後醍醐天皇にも傾倒することをせず」⁴⁵、それゆえ鎌倉の幕府滅亡を待つてようやく西芳寺に湘南亭を設けた。建長寺や円覚寺といった名だたる禅の寺院で修行を重ねるなど、夢窓疎石の生涯は鎌倉の土地とあれほど緊密だったはずが、しかし彼による禅の理念の具現化は、ここにあれば「北条氏と運命を共にする危険を察知していたから」⁴⁶か、鎌倉ではなく京都で達成された。そしてこのことは、桃源郷としての湘南の不可能性が、ほかでもない鎌倉のうちに、まさしく虚無の、虚空の、零度の状態で潜在することを、反語的に、あるいはむしろ否定神学的に照射しているはずだ。

事実、瑞泉院の裏山に夢窓疎石が建立した徧界一覽亭の跡地からの「眺望は今なお健在であり、山並みや木々を越えて、晴日には富士山がひとりそびえたつ姿と相模湾の海景を望むことができる。(…) ここで渡来僧を含む禅僧らと偈頌を交わし会い、禅境を深めていったものと思われる」⁴⁷。それでもなお、この富士の姿と海原が、夢窓によって“湘南”の語のうちに回収されることはなかった。その光景を借りて禅の境地を表現することなく、彼は“湘南”の語をいったんここから放擲した。そのかわ

りに、ほころんだ夢窓の臉のもとここで見透かされずにいなかったもの、それは、禅どころか仏陀の境地としてのガンジス河の風景であった。「到此人々眼皮綻、河沙風物我焉瘦」⁴⁸。

湘南亭を抱えた黄金池畔の庭園を下段とする西芳寺の上段の庭園は、枯山水による洪隠山石庭となるが、その「山頂には周辺の景色を法界として眺望するための縮遠亭が建てられていた。この亭は、瑞泉寺の徧界一覽亭に類するものであろう」⁴⁹。西芳寺まで持ち越された湘南の不可能性は、おそらく零度の状態でここに潜在している。ほかでもないその不可能性ゆえに、“湘南”の語を介して実現されるやいなや、それはたちまち霞み、暈け、ついには霧散せざるにいられない。換言すれば、鎌倉のうちに潜在するかもしれない無の、空の可能性を、“湘南”の語をもって汲み尽くそうと試みたとたんに、おのれの具体的な肌理のもと、その光景はたちどころに思想から逸れ、理念化に抗い、瞑想を礙げ、ここをまぎれもない鎌倉のものとして、それどころかはや鎌倉であることさえ退ける剥きだしの出来事それ自体として、私たちの知覚に対峙するにちがいない。

いくつかある夢窓疎石の全身像の頂相のうちひとつに、「重文指定の天龍寺蔵で、「曆応庚辰仲秋、西山隠子疎石、潭北軒に書す」と、曆応三年（一三四〇）八月、夢窓六十六歳の年に着賛されている」⁵⁰ものがある。それが夢窓自身によって掲げられたものかどうかはともかく、少なくとも彼の生前に潭北の軒号が使用されていたことは、この賛辞に如実に登記されているところである。たとえば、『詩学大成』の「寄友」⁵¹の項には「湘潭一葉黄」⁵²の表記が見られる。もちろん、ここでの潭の文字は、流れの深みといったほどの謂の一般的な語用であろうが、李白（701-762）に「湘潭幾日到」⁵³の五言句が、許渾（791-854?）には「湘潭雲盡暮山出」⁵⁴の七言句が詠われるなど、湘南と潭北とが一對をなすことは明らかである。したがって、夢窓の湘南亭の号もまた、このとき潭北の亭号とあわせて存立していたものとして疑義はないだろう。

“湘南”の語の初出とその由縁については、ひとまずここまでは遡ることができる。けれど禅の思想とはほとんど無縁のまま、張泌（生歿年不詳）による「湘南自_レ古多_二離怨_一」⁵⁵のごとく、瀟湘を含め「数は多くはないけれども、湘南の或る風景を美しく描写した詩文が東晋から現れてくる」⁵⁶のだから、『碧巖録』の成立それ以前に“湘南”の語の日本に輸入される余地がなかったことは、ここで必ずしも断定しうるものではない。

また、湘南が唐代からの禅宗の拠点である限りにおいて、鎌倉の武家政権が禅宗に深く帰依するまでに、偶発的にはあれ禅の思想とともにその語が日本に紹介され

えたことも否定できない。なるほど、「禅は、鎌倉時代に日本に伝来したとするのが一般的である。しかし、その実は、鎌倉時代以前に伝来していた。その伝来は、ただ一宗としてではなく、他宗の兼学として」⁵⁷であった。このため「すでに平安時代前期において、学僧や一部の権力者の間では、中国において禅宗が盛んであることが意識されていた」⁵⁸ものと考えられる。

それでもやはり、建長寺の洪鐘の表面に鑄込む鐘銘として、開山の「大覚禅師が「建長_レ禅寺住持宗沙門道隆」と記」⁵⁹すまでは、「日本には禅寺というものは無く、当時の仏教の中心は京都であって、京都では天台・真言の諸宗が、宗権を握っていて、「禅宗」と言う名目を新たに立てることは、禁忌とされていた」⁶⁰のであり、そうしてみると、禅宗が憧憬した理念的な性質を歪めるかたちで“湘南”の語がすでに巷間で流通していたとは考慮しがたい。

さらに、たとえば中巖圓月（1300-1375）の『東海一漚集』には、「夢中得句參李杜、郊島瘦寒何足云」⁶¹として、李白や杜甫（712-770）、孟郊（751-814）や賈島（779-843）らの詩句をめぐる言及があるほか、「聽童吟杜句有感」⁶²とも記載されている。これなどは、杜甫をはじめそうした中国古典文学が鎌倉禅林で教育の材料として使用されていたこと、そしてそれゆえに、鎌倉禅林にあってはこれらが禅の修行の通奏低音としてその思想と共鳴しえたこと、そのいかにも雄弁な証左となるだろう。中国古典文学の詩句に賞められた湘南の風光明媚と、禅の境地としての湘南の理念性とは、ここで鎌倉禅林の「僧童が杜甫の詩を吟じているのを聴いて感懐を催している」⁶³中巖圓月にとっても、かつて彼自身がほかならない寿福寺の僧童だったころから、およそ不可分のものであったにちがいない。

だからこそ、夢窓疎石より以前の湘南のありようといえば、おそらく夢窓におけるそれとたがうことのほとんどないまま、本性としての不可能性のもと、虚無の、虚空の、零度の状態でいたるところ遍在していたはずである。「十／虚無間之謂遍」⁶⁴。

0.1.4

ではいったい、“湘南”の語が私たちになじみのある風景を象るのは、いつ、どのようにしてだろうか。

応仁の乱から逃れるように東に流れ、京都五山の禅僧の身分から還俗した萬里集九（1428-1507?）は、美濃の鵜沼に結んだ草庵に面識のない僧が現われたときの逸話を、この庵の号を題した『梅花無盡藏』に書き遺している。そのとき彼は、この僧に一篇の七言絶句を授けるが、この序文でその僧について「遊湘南五年」⁶⁵と説明

し、さらに本詩のなかでこれを「五年嘗嶮碧湘寺」⁶⁶と詠んでいる。ここでこれをただちに「五年間、鎌倉に遊学し」⁶⁷たと訳出できるかどうか、また碧湘についても「碧は美称。湘は鎌倉をさす。湘は、相模の水辺の意」⁶⁸と説明できるかどうか、その妥当性の検討はひとまず留保するとして、少なくとも碧湘寺が“湘南”の寺院を意味することは確実である。

ところで、『梅花無盡藏』の萬里集九は、ある山水画のための序文において「迺湘南巨福之苾芻」⁶⁹と記している。巨福之苾芻とはまぎれもなく鎌倉五山の第一位、巨福山建長寺の僧侶のことであるから、ここでの“湘南”の語については、それが鎌倉を指示することはもはや疑いようがない。つまりここでは、“湘南”の在処を説明するために建長寺が利用されているのではけっしてなく、あくまでも建長寺の所在を限定するそのためにこそ、“湘南”の語は使用されているのである。そうしてみると、「わが国では、鎌倉時代、相南（相模国の南方の意）の語が、その海辺一帯を、前記の中国の湘南になぞらえて「湘南」と呼ぶようになった」⁷⁰のかどうか、その如何はともかく、いわゆる「現行の「湘南」の用法も、大体、この時代から始まる」⁷¹ものとみなしていっこうに無理はないはずである。

萬里集九だけがひとりそうしたわけではあるまい。「建長寺・円覚寺を中心とする鎌倉禅林には渡来僧を中心に宋元風の禅宗文化が会話・清規規矩・建築・絵画・墨蹟など諸方面に浸透していた」⁷²その限りにおいて、かつては京都五山の禅僧であったものの、いまや鄙びた世俗の一庵主にすぎない彼によるこうした記録は、当時の鎌倉や京都の禅林においてすでに“湘南”が鎌倉の雅称とされていたこと、またそれに加えて、『梅花無盡藏』が著されたころにはこの雅称の使用が地方の禅僧らにまで敷衍していたこと、そうした事実を明確に証言するものである。

というのも、「鎌倉期と同じように、あるいはより緊密に、室町時代においても鎌倉から多くの禅僧が京都と往来し、文化的な交流が多く見られた」⁷³からである。それどころか、ただ京都五山とのあいだのみならず、「鎌倉禅林は本末関係によって東国各地の禅宗寺院とのつながりを広く持つようになってゆくのであり、京都との関係も併せて、鎌倉禅林は様々な寺院との結節点としての役割を果たして行くことになる」⁷⁴。ここにおいて、“湘南”の語は、ようやく鎌倉に着地し、そこに立脚するとともに、まずは鎌倉のありようを表象する能記として実現する。このとき、禅の思想に近接的な人口に膾炙する雅称としての“湘南”は、湘南の理念性をふまつつも、なお通俗化の過程でその本性としての不可能性には目を瞑らざるにない。そして、碧い水のほとりなどといった

美辞や美観への形骸化を厭わずいったんこれを甘受したうえで、それを鎌倉における具体的な肌理の出来に晒し、その紋切り型の輪郭を解きほぐし、変容する光景のうちに編み込んでなじませながら、いま“湘南”は、ここでひとつの持続として自律的に機能しはじめている。

鎌倉や京都の武家政権は、こうした禅の思想を庇護した。つまり、「強靱な肉体と強い精神とが求められた時代において、特に精神を鍛える方法として禅が用いられたのである。この武士の接化に用いられた公案群をまとめたものに、『湘南葛藤集』と呼ばれるものが有る」⁷⁵が、たとえばこの「湘南葛藤録」は、天文十二年（一五四三）十月、鎌倉明月院で、（…）禅興寺の無隠老師が、天文時代の武士を教導提撕するのに都合よい機縁百則を集めて、（…）五百部印施したものである」⁷⁶。要するにそれは、鎌倉で「学才乏しい武人（…）武門の入道輩を接化した一つの禅風」⁷⁷にあって、禅の理念をわかりやすく文書として印記し、配布されたものであるわけだ。そしてもちろん、ここでいう“湘南”もまた、鎌倉の、もしくは鎌倉禅林の謂であることは論を俟たない。

さて、夢窓疎石に請われ、徧界一覽亭についてしたためた建長寺の清拙正澄（1274-1339）は、そこで「相陽之東、有紅葉谷」⁷⁸と叙述している。「水ノアル所ノ北ヲハ陽ト云」⁷⁹う限りにおいて、ここで相陽とは、相模湾の北、すなわち相模国を意味するとともに、由比ガ浜から南を鎌倉湾に開いた鎌倉の換喩的な表現ともなりうる。なぜなら、実際の紅葉谷の所在とは、相州をまるごと背負ってその東に紹介されるには、いかにもささやかにすぎるからである。加えて、太田道灌（1432-1486）に江戸へと招かれ、美濃から東遊したくだりを語るなかで、萬里集九は、『梅花無盡藏』に「余扣相陽者旬餘、福鹿之兩大刹、龜谷鶴岡、及相府諸侯之舊礎、一覽之敗亭、六浦之遺廟、瀬戸金澤」⁸⁰と記載している。徧界一覽亭を含めた鎌倉の寺社ばかりか、六浦や金沢までが彼の訪問先として列挙されるここでは、相陽は、いくらか武蔵の領分を侵犯することは覚悟のうえで、相府の語の響きと交感しつつ、とりわけ鎌倉幕府の面影を換喩的に表現する。

しかしながら、『梅花無盡藏』には、「且見惠湘陽之兎毫」⁸¹との語用も認められる。仮にこの湘陽も「鎌倉をさす。湘は相模の水辺の意。専ら鎌倉をさす」⁸²のものであるとすれば、かつて夢窓や清拙のころには相陽の表記によって換喩的に参照されえた鎌倉が、その用法の余韻をひきずってなお、この萬里のころには湘陽の表記によって今度は隠喩的に参照されていたことになる。つまり相の一字は、本来は相模国をまるごと指示するものだったところ、碧だの陽だの南だのといった文字をしたがえることで指示対象の範囲を圧縮し、鎌倉の換喩的な

表現となりえた。けれど他方で、禅宗における正統性の表明を鎌倉禅林が託した気障か、それとも単に、相模の名辞とのあいだの不都合を回避するための方便か、いずれにしても、こうして間接的に鎌倉を参照させる機能を、やがて湘の一字が担保することになったのである。

0.1.5

萬里集九が相陽と湘陽とを意図的に分別していたかどうかについては、確証が遺されているわけではない。もし彼にそうした分別があったにしても、これを他の禅僧らが共有していたとも限らない。だから傍目にはそれは、無遠慮に $\dot{\text{y}}$ があてがわれた結果として、相の一字がきまぐれに湘の一字に代置されただけであるかのような理解を許容する。

だが、おそらくそうではない。なるほど、禅林を庇護した武家政権の権勢のもとに、相の一字はいったん鎌倉の範疇に圧縮された。かつて「建長寺の洪鐘が铸造されるに当って、大覚禅師は自分の信念に従い、且つ時頼の援助によって、天下に公けに「建長禅寺」と謳い上げ(…)これは大覚禅師の実力と大檀那の後見とが物を言っているわけで、換言すれば京都に於ける天台・真言の宗権も、此处鎌倉には及ばなかった」⁸³ところを、鎌倉幕府の衰退と滅亡をみはからって、相の一字は自らをもとのかたちで復元し、朝廷になびくように西方への膨張を試みる。この反発力を吸収し、散逸させ、その矜持をなおここに担保しておくためにこそ、かつて鎌倉幕府の栄華を支持し、これに支持されていた禅林の理智は、 $\dot{\text{y}}$ を相の文字の西側に穿ったのである。

換言するなら、それは洛に対する湘であるかもしれない。「洛」は「洛陽」即ち京都の意味で、「洛中」は漠然とした京内をいう言葉⁸⁴である。この呼称は、いうまでもなく、かつて幾度も中国王朝で首都機能を担った都市に因むものであって、その借用にはある種の劣等感も帯同するが、本来の洛陽は、湘江における湘南と同様に、まさに洛水のほとり、その陽向に所在している。この洛を援用するとき、自身を排他的に囲いつつ、京都はその外側としての洛外の概念を産出する。そのような「洛中」「洛外」も、中世以来、次第に歴史的に使用されてきた、京都の地域分けの方法で(…)ほぼ十五世紀までに「洛中」「洛外」という形でおさまった⁸⁵とされる。帝都でありつづけるとともに、鎌倉幕府の滅亡をもって首都の威光をも回復することとなった京都は、けれど平安京の成立からこのかた、依然として中国の都のありようにならって自らを設定しないではない。

行政権が武家の手に委ねられ、いったん京都を留守にしていたあいだに、鎌倉の幕府による庇護のもと新し

く勃興した禅宗も、いまや「洛外を中心に巨大寺院をつぎつぎと誕生させていた。禅宗は、武家を中心に多くの帰依者を得ているが、その最大の支援者は、なんといつでも室町幕府であり、これによって、洛外の景観は一変するほどだったのである」⁸⁶。なぜなら、「京都に政権の中心を置いた足利氏は、朝廷や寺社、いわゆる権門との直接的な対峙を余儀なくされ(…)その中で自らの正統性、政権を担うに足る権威・権力を保つためには、彼らと妥協・連携しつつも、鎌倉幕府以上に、中国の新しい文化をいち早く取り入れること」⁸⁷が重大な関心ともなったからであり、そしてそれは「この時代、禅宗寺院との結び付きを深めることとほぼ等価」⁸⁸だったにちがいないからである。

こうしてみると、もはや武家政権の在所にあらずとも禅宗の正統を継承する矜持のもと、鎌倉もまた、禅における理念を参照しながら、湘の一字をもって京都との関係性のうちに自らを相対化し、この時代にその価値をあらためて位置づけようとしたものとみなすことも、あながち道理がないわけではないだろう。

事実、たとえば「將軍足利義詮から義満の時期にかけて、(…)「相洛五山」という表記はあり、相模と洛中の五山、という意味であろう」⁸⁹から、「湘南」の語の鎌倉への着地と立脚については、やはり室町幕府および京都五山の成立にながしかを与ったところと考えるべきである。「京都五山と鎌倉五山に分かれ、十を数えるに到る契機は、天龍寺の追加による再編である。この時点では、いまだ鎌倉中心であり、(…)相国寺の追加による五山の再編時まで、京都五山と鎌倉五山は、各々五ヶ寺の構成となって、京都に中心が移りつつも各々独立性を高める。(…)足利氏が新たに京都に創建したふたつの禅宗寺院により、京都五山・鎌倉五山は確定したのである」⁹⁰。

相洛五山の表記においては、なによりもまず、相と洛の語順が鎌倉五山の気位の高さをうかがわせる。そのうえで、ここではすでに、共通項としての五山を媒介に鎌倉と京都とは一対となっているわけだから、あとはこれを視認しなめらかに伝達するための表現の精査と洗練が、とりわけ漢文ないし漢詩になじんだ禅林において試みられることがあってもなら不思議はない。その限りにおいて、相洛五山の表記を可能にする思考にあっては、おそらく、相の文字よりもなお湘の字面のほうが、瀟と湘、湘と潭のごとく洛の一字とならべて視覚の手触りに収まりがよく、しかも対称性における対照性の強調にも利があるはずだ。もちろんここでは、禅の理念をめぐる漢文や漢詩における表記にあらかじめ親和性の高いものであることが、相の文字から湘の一字への換喩的なすりかえの布石となっている。つまりそこでは、京都の洛となら

べて秀でるものとしなくても、なんらそれと見劣りするところなく、高尚な見映えを期待できるのである。

京都において洛中の語用が定着しつつあるそのころに、夢窓疎石は西芳寺に“湘南”の語を放擲したものの、あくまでもそれは禅の理念を参照し、そこに送り返されるものであって、それは単なる洛外にはなく、洛の一字にとって絶対的な外部に潜在するものであった。しかしながら、洛の語用がようやく落ち着いたころ、たとえば京都五山で修行した萬里集九が巨福山建長寺を“湘南”の所在と登記することによって、洛の一字に對置されるべきものとして、湘の一字が相の文字の具体性のうちに召喚される。

ここでは相模が鎌倉の換喩的な表現であるとともに、湘の一字それ自体が相の文字の換喩として機能し、そこに鎌倉の名辭が代入されることをあてにする。天皇の都であるとともに武家の都ともなった洛、すなわち京都に対して、禅林の都、禅宗の総本山たる鎌倉は、湘の一字のもと、漢詩や漢文に収斂する当代の叡智、およびそれらに集約される文化的な洗練をめぐるその権能を發揮せずにはいない。湘の一字は、こうして禅における湘南の理想性まで迂回しながら、ようやく鎌倉の隱喩となる。武家政権の担い手が交替し、首都の在所が遷移しようとも、いまなお禅宗の正統は“湘南”に息づいているのである。

相の文字の西側に穿たれた π 、それは、多孔質どころか全孔質とっていい虚無の、虚空の遍在性からしたたる不可能性の一滴ずつであり、孔の塊に突き刺された三本の針、あるいはむしろその痕跡としての孔にほかならない。孔を空けるのではない。そこはすでに、いたるところ孔ばかりであり、孔しかない。それゆえそこに残されるものとは、孔を喰む孔と孔に喰まれた孔、いわば孔の孔であるだろう。いまや湘とは、虚無の、虚空の遍在性が、ある断面、ここでは相の文字の具体性においてにわかにか結晶化し、その潜勢力を不意に行使したことの残滓として、孔に上書きされたさらなる孔の謂となる。

しかしながら、これらの孔は、虚無を、虚空を喰みつけ、それに喰まれつづける限りにおいて、けっして能動的ではなく、あくまでも受動的である。それらは摂取や吸収をもっぱらとする空隙としての口なのであって、言葉を発散する能動的な機能としての口のことはない。こうした能動的な口とは、帝都であるとともに首都でもあるような、洛の文字のうちに局所化された口である。そうではなく、受動的な空隙としての口であること、その遍在性としての無限の、無尽蔵の目となること。湘とは、煌く海の水面を木々の向こうに見透かす目である。饒舌な口の能動的な機能による言語をもって組成される堅牢な世界の構造、たとえば条里制にもとづく洛の方格

的な秩序に對峙し、葉と葉の重疊、言霊と言霊の連繋の空隙から零れる光を、そこに持続する潜在性をあまねく吸収する孔としての目となること。

もはやそれは、視覚はおろか、あらゆる知覚器官に対して透明な海綿相、遍在性の闇のさなかの漆黒の濾過膜であるかもしれない。そしておそらく、いたるところ網目に網目を重ねて潜在するこの感覚の不可能性こそが、湘の一字に担保された禅の理念なのである。洛における方格状の秩序にあつては、口の輪郭としての格子そのものが意味を持つ。だが、湘における網目状の組み込みにあつては、編まれた網ではなく、網が編む目、透明の網によって喰まれ、にわかにか目となる虚無、虚空、すなわち孔こそが、“湘南”の一語が宛てて私たちを送り返す零度なのである。

【註】

- ¹ 伊倉退蔵＋神崎彰利＋小松郁夫＋杉山博＋圭室文雄＋貫達人、『角川日本地名大辞典 14 神奈川県』、『角川日本地名大辞典』編纂委員会／編，角川書店，1984，p.483.
- ² 山内春夫，「「湘南（瀟湘）」考—文学作品と宗迪の八景図—」，『風花 中国古典詩論抄』所収，彙文堂書店，1992，p.195.
- ³ 惟高妙安，『詩學大成抄 第三』（『詩學大成抄 3』，『市立米沢図書館デジタルライブラリー』所収，http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA146_view.html，市立米沢図書館，p.32.），室町後期.
- ⁴ 植木久行＋宇野直人＋松原朗，『漢詩の事典』，松浦友久／編，大修館書店，1999，p.466.
- ⁵ 同上.
- ⁶ 松尾幸忠，「瀟湘考」，『中国詩文論叢 第14巻』所収，早稲田大学中国詩文研究会，1995，p.77.
- ⁷ 山内，前掲書，p.212.
- ⁸ 同書，p.213.
- ⁹ 伊倉ほか，前掲書，p.483.
- ¹⁰ 小風秀雅，「歴史のなかの地域イメージ」，『湘南の誕生』所収，「湘南の誕生」研究会／編，藤沢市教育委員会，2005，p.1.
- ¹¹ 島本千也，『海辺の憩い 湘南別荘物語』，私家版，2000，pp.43-44.
- ¹² 原田保，「プロローグ レイドバックな暮らしを楽しむ葉山スタイル」，『葉山 高質なスロースタイルブランドの実践』所収，地域デザイン学会／監修，芙蓉書房出版，2015，pp.13-14.

- 13 富山英輔, 「湘南市??」, 『湘南スタイル magazine Vol.9』所収, 榎出版社, 2002, p.11.
- 14 佐々木哲也, 「一九〇九年八月 湘南各地の避暑客(記事)解説」, 『大磯町史 3 史料編 近現代(1)』所収, 大磯町史編集委員会/編, 大磯町, 1998, p.362.
- 15 伊倉ほか, 前掲書, p.482.
- 16 同書, p.483.
- 17 同上。
- 18 神奈川県知事室広報課, 『神奈川の近代化—その百年—』, 神奈川県, 1969, p.266.
- 19 吉見俊哉, 『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』, 岩波書店(岩波新書), 2007, p.139.
- 20 山本節子, 『西武王国 鎌倉』, 三一書房, 1997, p.5.
- 21 芳賀徹, 『桃源の水脈 東アジア詩画の比較文化史』, 名古屋大学出版会, 2019, p.258.
- 22 山内, 前掲書, p.201.
- 23 同書, p.213.
- 24 高野澄, 「西芳寺の歴史」, 『古寺巡礼 京都 36 西芳寺』所収, 梅原猛/監修, 淡交社, 2009, p.100.
- 25 堤久雄, 「鎌倉様式を規定する西芳寺洪隠山石庭の主題と形成の時期」, 『日本文化としての庭園 様式と本質』所収, 丹羽鼎三記念出版会/編, 誠文堂新光社, 1968, p.139.
- 26 高野, 前掲書, p.101.
- 27 日向進, 「西芳寺の茶亭」, 『古寺巡礼 京都 36 西芳寺』所収, p.118.
- 28 柳田聖山, 「夢窓の京都」, 『夢窓国師語録』所収, 講談社, 1983, p.13.
- 29 圓悟克勤, 『碧巖録 上』, 朝比奈宗源/訳註, 岩波書店(岩波文庫), 1979, p.218.
- 30 柳田, 前掲書, p.14.
- 31 同書, p.15.
- 32 実際の建築物としては、後醍醐天皇より託された臨川寺において、「無窓はここに生前に建てる墓所、つまり寿塔を構えて「三会院」と号し、夢窓派の度弟院としている」(竹貫元勝, 「夢窓疎石小伝」, 『夢窓疎石』所収, 竹貫元勝+熊倉功夫/編, 春秋社, 2012, p.33.)。
- 33 柳田, 前掲書, p.17.
- 34 熊倉功夫, 「中世文化をきりひらいた夢窓疎石」, 『夢窓疎石』所収, p.74.
- 35 堤, 前掲書, pp.141-142.
- 36 堀川貴司, 『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相』, 国文学研究資料館/編, 臨川書店, 2002, p.32.
- 37 白幡洋三郎, 「西芳寺の庭園—「日本様式」の苔庭」, 『古寺巡礼 京都 36 西芳寺』所収, p.126.
- 38 長谷川昌弘, 「宋代禪と湖南省」, 『禅研究所紀要 第23号』所収, 愛知学院大学禅研究所, 1995, p.163.
- 39 芳賀, 前掲書, p.15.
- 40 同書, p.18.
- 41 同上。
- 42 沖本克己, 『禅 沈黙と饒舌の仏教史』, 講談社, 2017, p.137.
- 43 ロラン・バルト, 「記号学の原理」, 『零度のエクリチュール 付・記号学の原理』所収, 沢村昂一/訳, みすず書房, 1971, pp.180-181.
- 44 柳田, 前掲書, p.8.
- 45 竹貫, 前掲書, p.32.
- 46 熊倉, 前掲書, p.66.
- 47 仲隆裕, 「夢窓疎石と庭園」, 『夢窓疎石』所収, p.197.
- 48 夢窓疎石, 〈徧界一覽亭〉, 『鎌倉市史 史料編 第三・第四』所収, 鎌倉市史編纂委員会/編, 吉川弘文館, 1958, p.311. なお、『新編鎌倉志』は、「河沙風物」を「河沙風景」としている。河井恒久+松村清之+力石忠一, 『新編鎌倉志』, 『大日本地誌体系(二十一) 新編鎌倉志・鎌倉攬勝考 大日本地誌体系』所収, 蘆田伊人/編, 雄山閣, 1962, p.29. を参照のこと。これを引いたのか、『新編相模国風土記稿』も事情を同じくする。昌平坂学問所地理局, 『大日本地誌体系(一九) 新編相模国風土記稿 第一巻』, 蘆田伊人/編, 雄山閣, 1985, p.117. をあわせて参照のこと。
- 49 仲, 前掲書, p.206.
- 50 竹貫, 前掲書, p.46.
- 51 林楨, 『聯新事備詩學大成卷之十五』(『聯新事備詩學大成 5』, 『国立公文書館内閣文庫デジタルアーカイブ』所収, <https://www.digital.archives.go.jp/das/image-j/M2015090310265309701>, 国立公文書館, p.54.), 南北朝期。
- 52 同上。
- 53 李白, 〈長干行二首〉(『李太白詩集』収録), 『漢詩大観 上巻』所収, 佐久節/編, 鳳出版, 1974, p.868.
- 54 許渾, 〈凌歊臺〉(『唐詩選』収録), 『漢詩大観 上巻』所収, p.770.
- 55 張泌, 〈曉歌二湘源縣一〉(『唐詩選』収録), 『漢詩大観 上巻』所収, p.771.
- 56 山内, 前掲書, p.209.
- 57 鈴木省訓, 「『武士禅機縁集』研究序説—武士と禅

- 」, 『駒沢女子短期大学 研究紀要 第二十五号』所収, 駒沢女子短期大学, 1992, p.21.
- 58 菊池大樹, 「鎌倉仏教と禅」, 『東アジアのなかの建長寺 宗教・政治・文化が交叉する禅の聖地』所収, 村井章介／編, 勉誠出版, 2014, p.225.
- 59 高木宗監, 『建長寺史 開山大覚禅師伝』, 建長寺史編纂委員会／編, 大本山建長寺, 1988, p.211.
- 60 同上。
- 61 中巖圓月, 『東海一漚集 一』, 『五山文學新集 第四卷』所収, 玉村竹二／編, 東京大學出版會, 1970, p.324.
- 62 中巖, 前掲書, p.342.
- 63 堀川貴司, 『続 五山文学研究 資料と論考』, 笠間書院, 2015, p.45.
- 64 清拙正澄, 〈徧界一覽亭記〉, 『鎌倉市史 史料編 第三・第四』所収, p.310.
- 65 萬里集九, 『梅花無盡藏 一』, 『五山文學新集 第六卷』所収, 玉村竹二／編, 東京大學出版會, 1972, p.688.
- 66 同上。
- 67 市木武雄, 『梅花無盡藏注釈 第一』, 続群書類従完成会, 1993, p.301.
- 68 同上。
- 69 萬里, 『梅花無盡藏 六』, 『五山文學新集 第六卷』所収, p.925.
- 70 市木武雄, 『五山文学用語辞典』, 続群書類従完成会, 2002, p.109.
- 71 市木, 『梅花無盡藏注釈 第一』, p.231.
- 72 佐藤秀孝, 「中世鎌倉の渡来僧—建長寺・円覚寺を中心として」, 『東アジアのなかの建長寺 宗教・政治・文化が交叉する禅の聖地』所収, p.192.
- 73 川本慎自, 「室町時代の鎌倉禅林」, 『東アジアのなかの建長寺 宗教・政治・文化が交叉する禅の聖地』所収, p.299.
- 74 同上。
- 75 鈴木省訓, 「『教乗公案集』について」, 『印度學佛教學研究 第四十一卷 第一號』所収, 日本印度學仏教学会, 1992, p.269.
- 76 高木, 前掲書, p.18. なお、鈴木省訓は「湘南葛藤集」としているが、建長寺がここで「湘南葛藤録」としているように、こちらが正式だろう。
- 77 同書, p.167.
- 78 清拙, 前掲書, p.310.
- 79 惟高, 前掲書, p.21. を参照のこと。
- 80 萬里, 前掲書, p.922.
- 81 萬里, 『梅花無盡藏 一』, p.679.
- 82 市木, 前掲書, p.231.
- 83 高木, 前掲書, p.211.
- 84 五島邦治, 「洛中」, 『平安時代史事典 本編下 た—を』所収, 角田文衛／監修, 古代学協会・古代学研究所／編, 角川書店, 1994, p.2678.
- 85 森谷尅久, 『地名で読む京の町 上 洛中・洛西・洛外編』, PHP研究所 (PHP新書), 2003, p.4.
- 86 同書, p.56.
- 87 堀川, 『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相』, p.21.
- 88 同上。
- 89 山家浩樹, 「鎌倉五山・京都五山と尼五山」, 『東アジアのなかの建長寺 宗教・政治・文化が交叉する禅の聖地』所収, p.311.
- 90 同書, pp.310-311.